

TOKO NO.163

目次

たかが高校だからこそ 1

どの子ども地域の公立高校へ2

されど高校 3

一「腐ったりんご」にされたままでいいの

【歴史に学ぶ】: 県立高校増設と一体の障害児収容計画はいったん挫折したが不況で息を吹き返した

去年のTOKO 4

こんな活動をしてきました

絆・てんてんこ・TOKO 6

総体として見た特殊教育の決算 7

一就職が減り福祉・医療・在宅が増加

窓ひろこ 8

郵送でお届けしている皆様へ

この情報誌がご不要の場合やホームページで見るので郵送しなくてもよいという場合は、お手数ですがメールか葉書等でお知らせいただければ幸いです。

たかが高校だからこそ



今年も県公立高校の入試本番に入りました。

この TOKO という集まりは、1988年春、草加市に住む知的障害の中3生徒2名（通常学級と特殊学級に在籍）が他市の生徒とともに、「0点でもみんなと一緒にいきたい」と定時制高校の入試にアタックし、

定員割れにも関わらず不合格にされた後も、教員や生徒たちの応援もあって自主登校の末、一人は秋に、もう一人は翌年入学を果たしたことをきっかけにして始められたものです。当時、彼女たちの後も、高校に入る知的障害の生徒が続いていたので、高校のようすや地域生活のことを月に一度語り合い、あわせて小・中学校の就学や学校生活に悩む親たちの話も聞き、時には教員や大人の障害者もまじって一緒に考える集まりを持っていました。

その毎月の報告を葉書1枚にまとめて、いろいろな人にお送りしていたのが、この TOKO ニュースの原型です。ナンバーは、当時から数えているので、163にもなっているわけです。

その後、活動の中心になる世代の変遷や学校・高校をめぐる状況の変化があり、毎月の集まりもさかんになったり、途絶えたりしましたが、昨年から「ミニおしゃべり会」として復活しています。今号で詳しく報告していますので、ぜひご覧ください。そして、あなたもどうぞ。

さて、原点である「高校」です。かつての時代を知らない方々が大多数のいま「なぜ高校なの？」という声が聞えそうです。かつての時代も初めは同じだったのです。私・山下自身がそうでした。「苦労しても3年間じゃない。その先の仕事や生活を考えた方がいいんじゃない？」と。

いまはこう言います。「たかが高校だからこそ」と。高校進学率98~99%。高校は誰もが行く。しかも、高校新卒就職者のほとんどが非正規雇用という現実。「高校は義務教育じゃない。能力・適性のある者だけが来るところ」と

いう意識が高校教員にはまだ根強いですが、みんながしかたなく歩く通路でしかありません。若者たちのため息も笑い声も、悲鳴も、夢も、みなこの通路をさまよってる。そんな、なんでもない普通の道を通さないのは存在の否定。障害があろうが点数が取れなからうが、一緒に歩ける自由通路に！そう言います。

また、もうひとつ、「されど高校」ということ。3ページで説明しますが、「高校は国民的教育機関」と文科省が言うほどになったのは、70~80年代に大都市をもつ都道府県が一斉に公立高校を増設したから。知事たちは、第2次ベビーブームの子どもたち（団塊ジュニア）に「15の春を泣かせない」と約束しました。しかし、その裏に「未就学児解消」に名を借りて、通常学級に多数いるとされる知的障害児等の障害児を追い出す計画がセットになっていました。私自身、これまで別々のことと思ってきましたが、実は高校増設のための特殊教育振興だったといっても過言ではないことがわかりました。

TOKO が初めてお手元に届いた方へ TOKO を初めて目にした方へ

子ども達を分け隔てなく育てるために どの子どもと一緒に地域の学校へ通えるように

地域へ、行政へ、働きかけている会です ぜひ、一度のぞきにきて下さい 待っています

どの子も地域の公立高校へ！



県立高校の入試が迫っている（3月2日）。写真は「セーラー服を着たくて高校に行きました」と県教育局交渉で語る埼玉障害者市民ネットワーク・野島久美子代表。その右奥はどの子も地域の公立高校へ埼玉連絡会・齊藤尚子代表。野島は都内の養護学校を卒業後、入所施設を経て家に帰り、さらに介助者を集めて一人暮らし、そして30代になって県立高校定時制に入り卒業した。10数年前、まだ階段ばかりだった電車を使い電動車いすで毎日通った。「介助者同伴でなければ連れて行かない」との宣告を無視し校外学習の集合場所に行ったら、けっきょく教員も生徒とともに手伝ってくれた。この社会は規格からはずれた人間を「配慮」や「支援」の名でふりわけ、競争を強めることで生産性向上をめざしてきた。多くの子どもにとっては、受験戦争がその入口。

しかし、野島のような障害児は幼いころから他の子どもと分けられ、受験戦争すら無関係。「差別はいけない」と誰もが言うが、実際は別々に分けられ出会わないから差別すら体験できない。セーラー服は野島にとって、若者たちと一緒に差別に向き合い乗り越えてゆくためのステージ衣装だった。

ふりかえれば、70～80年代全国一斉の公立高校増設は養護学校義務化と一体で実施された。第2次ベビーブーム世代の若者を多様な労働力として育成する対策が基本。それを効果的に進めるために小中学校の通常学級にたくさんいた障害児たちを特殊学級・養護学校へ追い出す「収容計画」と名付けられた県教育局の資料が残されている。その差別構造は変わらず、さらに重層化しているのに、既成事実の積み重ねによって、「能力・適性による選抜」とか「特別な教育的支援」という言葉が、当然のこと、自然なことのように語られる。そんな今だからこそ、セーラー服やブレザーを、どの子も着られるようにしようよ。（月刊わらじ 2月号表紙より転載）

どの子も公立高校へ埼玉連絡会（齊藤尚子代表）は県教育局につきのような趣旨の要望を出して交渉しています。ここでいう「障害」には知的障害をはじめすべての障害を含みます。

1. 「希望する生徒がすべて入れるよう募集計画を立て、希望しているのに入れなかった数を減らしてゆく」という県の回答通りに、定員オーバーでも柔軟な対応をして入れるなど、不合格者を少なくするよう高校を指導して下さい。
2. 「措置願」（障害があることにより不利益な取り扱いをすることのないよう配慮を申請する文書）が提出されたら、学力検査・調査書・面接など全体についての不利益を考慮して選抜するように高校を指導して下さい。
3. 遠距離通学が困難なことやバリアフリーの設備が必要なことなど、障害があることによる事情を考慮して選抜して下さい。
4. 本人にとって必要な受験時の配慮を確実に行ってください。
5. 定員内不合格を出さないようにして下さい。
6. 受験する生徒に対し応援するとともに、調査書等について障害による不利益がないよう、市町村教育委員会を通して中学校への指導をしてください。
7. 現在私たちと協議して作成中の、障害のある生徒の高校への受け入れに関する参考資料に関して、相互に十分な検討を行うとともに、それに沿って校長会に説明し、受け入れを進めるようにしてください。

高校現場には「適格者主義」といって、能力や適性のある者しか受け入れないという意識が根強く、競争倍率が出ると喜ぶ教員も少なくありませんが、県立高校は私立と異なり、「15の春を泣かせない」という合言葉で税金を投入して増やされてきた場です。今後の共生社会を担う若者を育てて行くためにも、あらゆる壁をのりこえて、さまざまな障害のある生徒を受け止めさせましょう。定員内不合格を出さないよう、県や高校へはたらきかけていきたいと思えます。

6年間門前払いにされてきた吉井英樹さん（日高高校）ほかの高校進学を応援します！

どの子も地域の公立高校へ・埼玉連絡会

- ・学力検査（3月2日）・面接（3月5日）では受検の介助または応援に行きます。
- ・受検後の3月6日教育局との話し合い

日高高校の普通科（第1希望）は11人オーバーですが、情報コース（第2希望）が11人定員割れで、第2希望でも入れるので定員内です。浦和高校定時制は40名定員で志願者13人です。定員内不合格を出さないよう、なんとしても受け入れるよう、県や高校へ伝えていきたいと思います！多数の参加をお願いします！

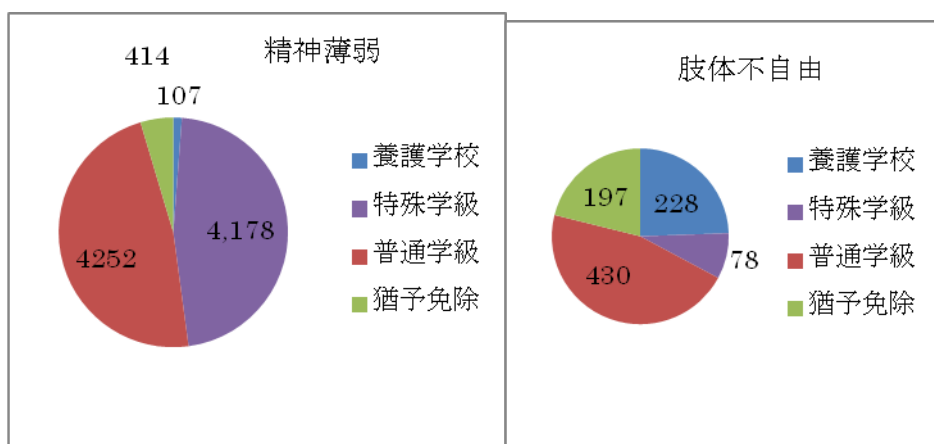
されど高校—「腐ったりんご」にされたままではないのか

歴史に学ぶ 県立高校増設と一体の障害児収容計画はいったん挫折したが不況で息を吹き返した

「高等学校の適正配置、適正規模、教育内容の多様化ならびに特殊教育についての答申」という冊子がある。「埼玉県高等学校教育振興協議会」が埼玉県教育委員会に答申したもの。1973年（昭和48年）。

当時の埼玉県では、急激な人口流入を背景に1974年から第2次の高等学校生徒急増を迎えることが予想され、1977年までに県立高校を30校新設することによってこの生徒たちを収容する計画を立てた。1975年には高校進学率が95%に達することが予想された。

かねて文部省は、「50人の普通学級の学級経営をできるだけ、安全に行うためにも、その中から例外的な心身の故障者は除いて、これらとは別に、それぞれの故障に応じた適切な教育を行う場所を用意する必要があります。」（「わが国の特殊教育」：文部省 1965）という方針を進めていた。いわば「腐ったりんご」か「ゴミ」?! それらに適切な教育?! この方針を具体化するために、同省は公立小・中学校における心身障害児の実態調査を行ってきたが、県レベルでも行なった。下の円グラフは1969年に埼玉県が行なった「義務教育段階における心身障害児童生徒」の調査。



これからわかること。精神薄弱、肢体不自由とも、普通学級在籍が最も多く、半数に近いこと。

はじめに紹介した1973年の答申では、1985年までの収容計画として、精神薄弱については養護学校在籍を11%に、特殊学級在籍を68%に増やし、肢体不自由については養護学校在籍を46%に、特殊学級在籍を26%に増やすとしている。普通学級は、

精神薄弱では17%、肢体不自由は9%まで減らす。さらに不就学、訪問教育等で、精神薄弱は4%、肢体不自由は19%を見込んでいる。1973年から1985年に義務教育段階の児童生徒の数は53万人から86万人に激増すると予想されるので、それだけ特殊学級、養護学校を増設するということになる。

ここでは精神薄弱と肢体不自由だけを例に挙げたが、他の障害を含め、県はこの時点で全児童生徒の2.91%が心身障害児だとカウントしていた（文部省の調査では3.69%：1967）。2.91%の大半を除くことは普通学級の経営を安全に行うためにぜひとも必要だったし、さらには高校へ進学する95%から心身の故障者を予め除いておく上でも不可欠なことと考えていたと思われる。

もうひとつ、ここでわかることは、1979年の「養護学校義務化」を挟んだ特殊教育の振興計画について、「完全就学」というネーミングで就学猶予免除者の解消が目的であったかのように語られるが、実は70年代を通し就学猶予免除者は急減していたこと。そして、新たな特殊教育振興計画においても、不就学者は残ると想定されていた事実。

さて、結論を急ぐ。高校生収容計画は実現されたが、障害児収容計画はいったん挫折した。就学指導委員会による強引なふりわけを拒否する親子があいつぎ、90年代前半には知的障害の養護学校に新1年生が数人しか入らない状況が一般的になり、高校の門をたたき知的障害の生徒も増えた。しかし、90年代後半から21世紀に入ると徐々に特殊教育への流れが大きくなって行く。

なぜなのか。筆者（山下）は不安定な雇用の下、家族の各々の不安と孤立が、「たかが学校」、「波風を立てずに」、「専門家依存」につながったと考える。それが「特別な教育的支援」という甘い言葉が普及した背景。しかし、それじゃあまりにもくやしいじゃないか。できないから、手がかかるからと、排除すること・されること・受け入れることで、社会はどんどん生きにくくなる。「されど学校」、「されど高校」だ。そこにいることでしか、変わりようがない。



。 去年のTOKO

こんな活動をしてきました

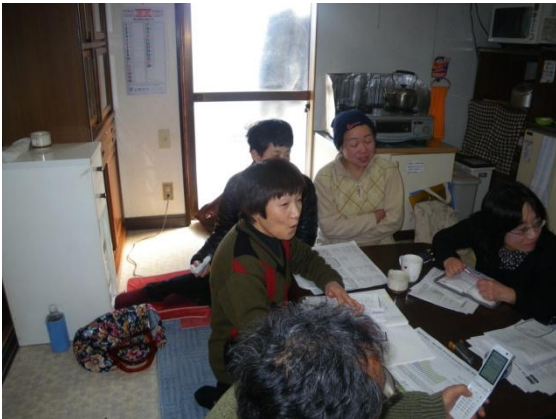
TOKOミニおしゃべり会とイベントの記録（2011年～2012年2月）



田んぼの中にある生活ホームオエヴィスが会場



高校生や大学生も



大先輩の親も新人の親も



生活ホームに入居する障害のある本人も



大きなイベントについては、そのつどTOKOに報告を載せていますが、毎月のミニおしゃべり会については報告していないので、まとめてみました。ミニおしゃべり会は、社会福祉法人つぐみ共生会が運営する心身障害者生活ホームオエヴィスの茶の間で、毎月行われています。前のページの写真のように、その時によってさまざまな顔ぶれが集まります。御相談がある方はもちろん、何もなくても、どなたでもお立ち寄りください。



1月14日（金）：ミニおしゃべり会 参加者13人

年間予定を決めた。（2月市教委要望書 3～4月春日部・越谷市教委と話し合い 5月野外おしゃべり会 9月勉強会 10月就学相談会）おしゃべり会の記録をノートに付けるようにする。

2月18日（金）：ミニおしゃべり会 参加者15人

高校生ボランティア3人も参加。国・県・市の資料を勉強する。要望書を作り市教委に届ける手はず。野外おしゃべり会会場は県民健康福祉村に。

3月18日（金）：ミニおしゃべり会 参加者7人

親の参加なく障害者本人が主のため、TOKOの説明と参加者の自己紹介。子ども時代多動でいじめを受けそ

の傷を振り払うため高校時代儀式的行動をとり、その薬の副作用か暴れて強制入院になり、その病院デイケアを通じて世一緒に参加したという本人の話。

4月15日(金)：ミニおしゃべり会 参加者9人

親の会に久しぶりに顔を出してみたら、若い親が多くなっていて早いうちに訓練しておいた方がという人が多かったという話。娘の担任に配慮をお願いしたが、娘は配慮されるのが嫌いという話。



5月8日(日)：TOKO野外おしゃべり会(県民健康福祉村) 51人参加

5月13日(金)：ミニおしゃべり会 参加者14人

若い親の参加が多かった。支援級に子どもを行かせたからいっそう地域とのつながりが大事と考えTOKOに来ているという話など。5月7日の越谷市教委、6月3日の春日部市教委との話し合いについて。

5月27日(金)：越谷市教委との話し合い 15人参加

6月3日(金)：春日部市教委との話し合い 13人参加

6月10日(金)：ミニおしゃべり会 参加者18人

松伏町で就学後ずっと付き添いを強いられているという話。町教委の態度が変わらなければTOKOとして話し合いも。子どもが友だちにけがをさせてしまいやはり特別な場ですつけてもらうべきかという悩み。支援級の教員たちがみな初心者ばかりになってきたという親からの悩み。

7月8日(金)：ミニおしゃべり会 参加者14人

越谷市長とのタウンミーティングに参加しようという話。通常学級に支援級の教員が問題のある子どもがいないか見に来たという話。支援級から通常学級への交流がほとんどないという話。教職のための介護等体験で参加した学生から、小学生時代の下級生の親が障害者自立生活運動のリーダーだった話。



9月4日(日) 就学・進路を考えるTOKO勉強・相談会 29人参加

9月9日(金)：ミニおしゃべり会 参加者11人

4日の勉強・相談会の反省。10月14日の就学相談会の準備の話し合い。幼児の療育の集まりで教育相談を勧められるのでこちらもそこでPRをという話。この時期教委から特別な場を勧められ悩む在学児の親にも伝わるようマスコミ対策も。学校から支援級等へのお勧めと見受けられるパンフが配られた話。

10月14日 共に学び育つためのTOKO就学相談会： 17人参加

11月11日(金)：ミニおしゃべり会 参加者8人

就学相談会の報告。進行もよくしっかり話しあえた、軽度障害の子の親が多かったという話。どこに障害があるのかわからない子が支援学校にいる話。高校教育局交渉について、県立高校の定員はすべての希望する子どもを受け入れるタテマエで設定されているという話。

12月9日(金)：ミニおしゃべり会 参加者9人

宮代で勉強会をやるので来てほしいという連絡があった話。手厚い指導を期待して支援級に入れたがかえってできないことが増えたので通常学級へ戻りたいがうまくいかないという相談が来た話。支援級を勧められたが通常学級に続け公文に通って県立高校全日制で学んでいた子が推薦で大学に入った話。



1月13日(金)：ミニおしゃべり会 参加者13人

どの子も地域の公立高校へ埼玉連絡会代表・斉藤尚子さんの話を聞く。息子晴彦さんはこだわりが強く水が飲めないで牛乳を水代わりにしてきたほど。字は苦手というより嫌いで、ボールペンを出すとはねのける程だが、大宮商業高校の補助教員が1年間かけて自分の名前を書けるようにしてくれたという。

2月10日(金)：ミニおしゃべり会 参加者10人

先日TOKOから数人が宮代町の親たちの会「のびのびハート」の勉強会に話に行ったが本日は宮代から3人が参加。勉強会のきっかけとなった通常学級就学を拒まれていた子は教委の態度が急変し受け入れられたという。支援級や支援学校にいる親子も含めてTOKOをやってゆく意味の話も。次回(3月16日)は市教委との話合いや年間計画を立てる予定。

TOKOミニおしゃべり会のご案内

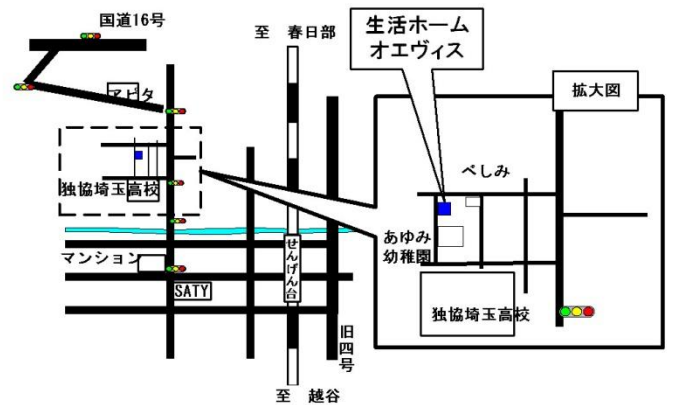


※ 毎月、第2金曜日、10:30から12:30

連絡先/TEL090-2202-5271(中山)

048-975-1524(オエヴィス)

(ただし3月は9日が県立高校の入試合否発表にあたっているため、16日(金)に行ないます。)



絆・てんでんこ・TOKO

昨年の東日本大震災と原発メルトダウンによってさらけ出された社会の危うさ、脆さ……それらを背負いながら、私たちは再び日常生活を重ねています。社会がどうあるべきかということとは別に、この日常をどう生きるかを、あらためて問い直す機会ではないでしょうか。

被災した人々の「絆」の強さは、全国・全世界の人々に驚きと感動を呼び起こしました。ただ、その「絆」の強さのあまり、障害のある家族がいる人々は、他人に迷惑をかけることを憚って、避難所に入ることを遠慮したと聞きます。

わらじの会が発足した30数年前の、就学免除・猶予にされた後「みづれえから外に出るな」と言われて、農家の奥でつぐんで暮らしていた障害者メンバーたちの姿が想い起されます。

「津波でんでんこ」というのも、そうした絆の強さのあまり共倒れになることへの戒めの言葉なのでしょう。

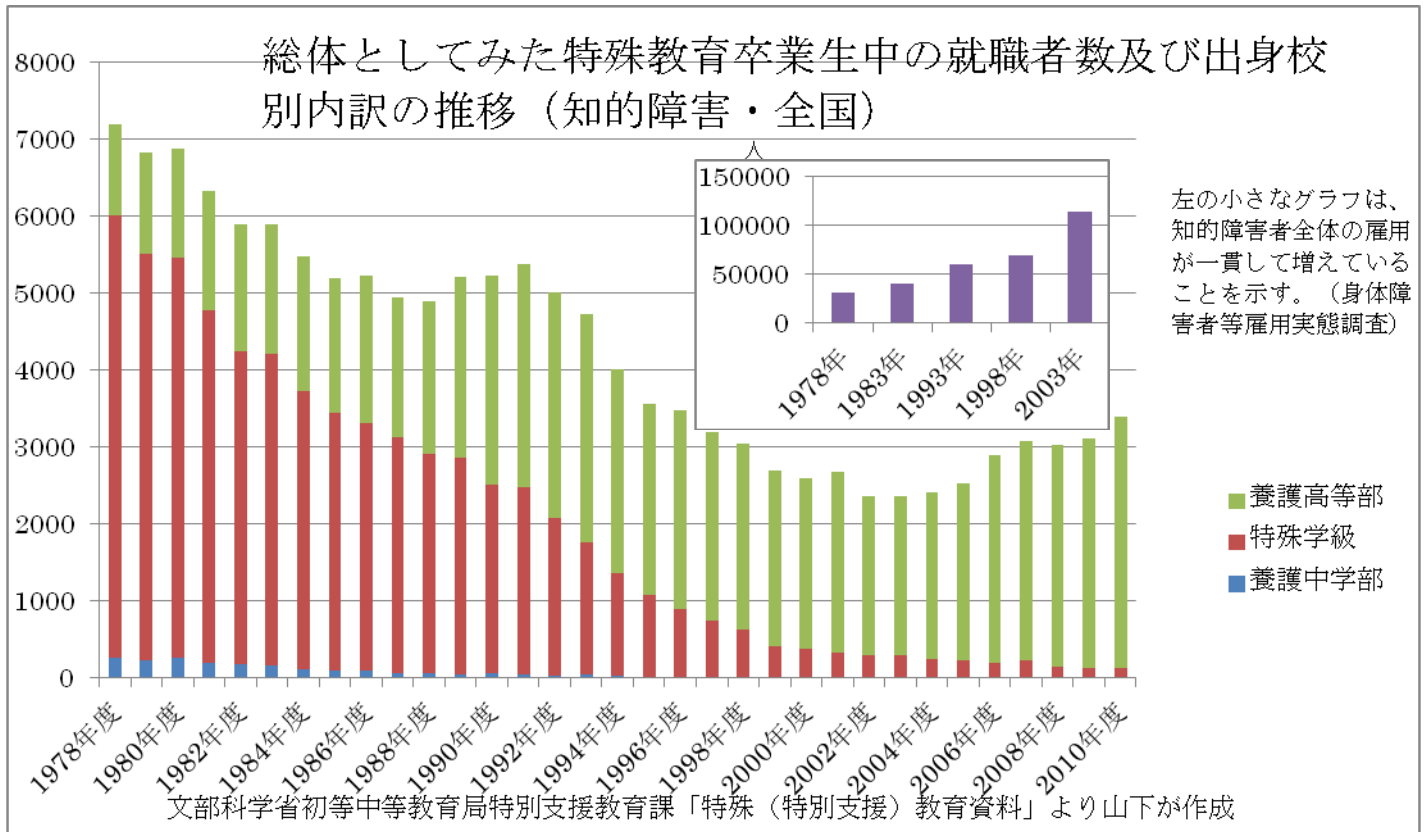
「絆」がクロージアアップされる背景には、それだけ多数の人々が都会へ集中し、関係が極めて弱くなった日常になっている現実があります。産業社会が都会をつくり、人々は仕事を求めてそこに集まります。職住が近接した故郷の暮らしとは異なっており、働く人々にとっては生活実感のない地域に住むこととなります。効率を求める暮らしが受験競争をもたらす。高学ビラミッドといわれる序列化を子どもたちに強い、その流れは中高一貫校や学力テストなど、低年齢の子どもたちにも及んでいます。

30数年前、障害者たちが家の奥から這い出して街に出て行き、当時は昇降設備もなく、改札も狭かった駅で、乗降客たちに車いすことかつかいでもらい、電車に乗ったり、団地の路上で露店を開きお客さんに計算をしてもらい、店じまいや帰りの送りまで手伝ってもらえたのは、それだけ都会人が孤立し、何らかの形で新たな絆を探っていたからでしょう。いま孤立感、もつともっと深まっています。

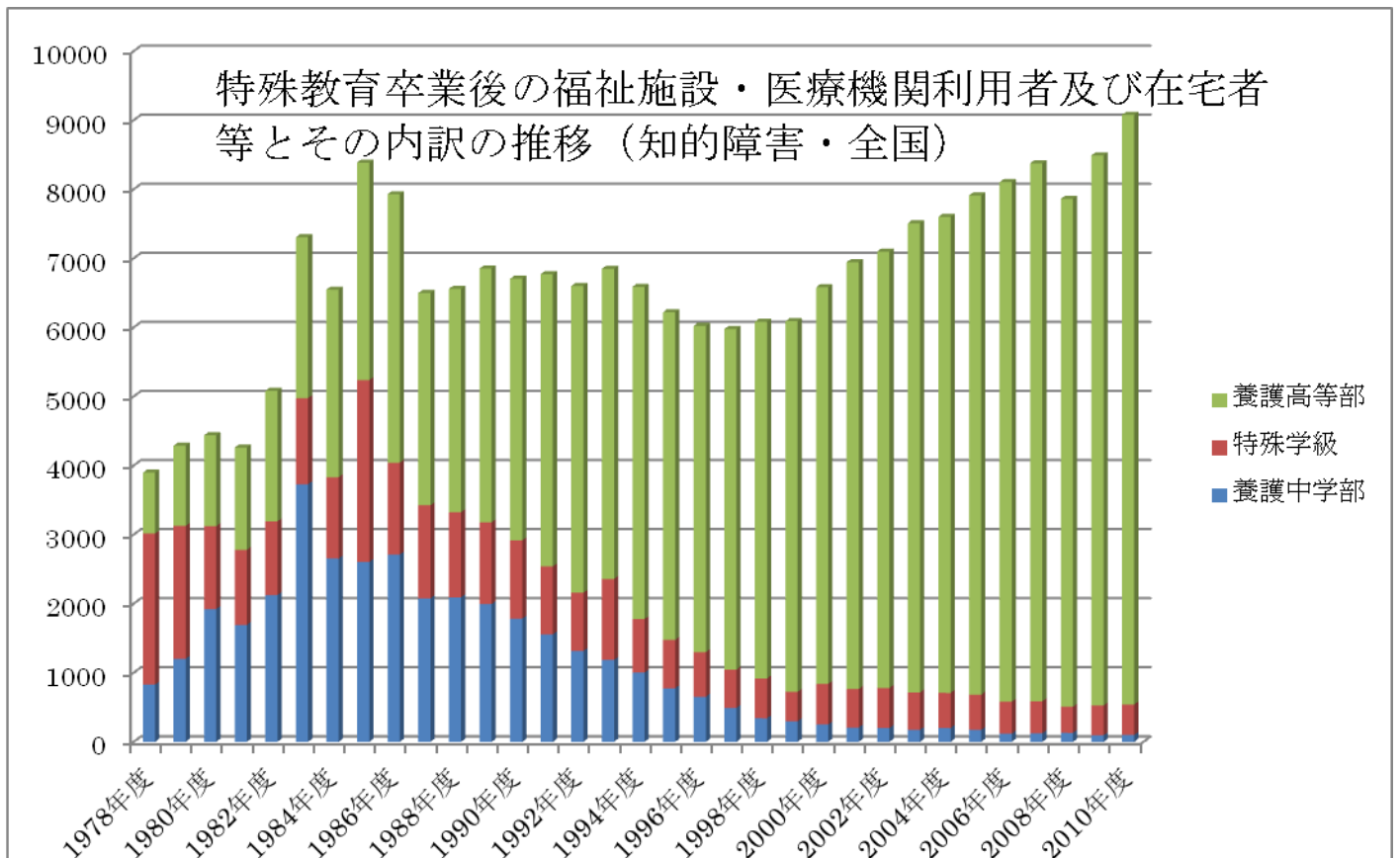
30年後のいま、ある人々が「軽度発達障害」として社会からはじき出されつつあることと、うつ病が「心の風邪」と呼ばれるほど一般化し、周りの人々を責め・自分を責め、袋小路に陥ってしまう人が増えて来たことは、まさに競争社会がもたらした状況といえます。

「てんでんこ」の中で人は出会い、一緒に動き、ぶつかりあって傷つき、おろおろときまよい、身を寄せ合ってはまた別れています。そこから別のところに「絆」を求めないのでなく、「てんでんこ」の中から創りだしませんか。もちろん緊急避難はありません。でも避難を固定化せず、そこを足場に「てんでんこ」の世間に入っていくことこそ価値ある緊急避難です。特別な教育の場や福祉施設、デイケア医療施設はみな緊急避難たりえていてるのでしょうか？

TOKOは通常学級や高校がよくて、支援級や支援学校は悪いところという考えの集団をめざしてはいません。前者は「てんでんこ」で後者は「避難所」です。「避難所」が固定化され、人を分類する場にならないよう、そして「てんでんこ」が他人の支えをたくさん必要とする人々も一緒にいるところに変えよう、だから障害のある人もない人も一緒に考えようと、寄り合っています。



前に作成した表（TOKO NO. 160）の増補版です。県教育局特別支援教育課の人が「最近はまだ就職が伸びているんですね」と反論したので、直近のデータを入れて作り直しました。これが「伸びている」と言えるのでしょうか？むしろあれだけ就労支援を強化したにもかかわらず…というしかない状況では？ 総体として、特殊教育新卒者の就職が激減し、下の表に示されるように、福祉・医療利用者・在宅者が増えています。



1978～1986年度は養護学校は中・高とも肢体、病弱養護を含む数（文部省の統計がそれしかない）。また無業者等と区分されていたものすべてを含む。1987年度以後は知的障害養護学校の数。また児童福祉施設・医療機関等とその他（在宅者等）を含む。

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「特殊（特別支援）教育資料」より山下が作成

窓ひらこ

だれもが敵にみえたとき
 じぶんをとて無力的に感じたとき
 なにかもほうりだしたくなったとき
 いそがしいとき いきがつまるとき

こころの窓をちょっとひらこう

2011年度 越谷市障害者地域適応支援事業

職場で体験 公開報告交流会

障害のある人 ♥ 施設 ♥ 職場

日時：2012年3月8日（木）午後0時～3時30分

午後0時：開場（展示観覧は午後4時までいつでも可能です）
 午後1時～1時30分：修了証・感謝状授与式
 午後1時30分～2時30分：ポスターセッション（展示場で体験発表します）
 午後2時30分～3時30分：事例報告（企業、施設の先進事例の報告を受けます）

会場：越谷市中央市民会館4階第15～18会議室

主催・連絡先：越谷市障害者就労支援センター

越谷市東越谷1-5-6 産業雇用支援センター3F

048-967-2422 fax048-967-2433

e-mail:k-syurou@cup.ocn.ne.jp

社団・夜の勉強会

スウェーデンのパーソナル アシスタンスと総合福祉法

講師・河東田博氏（立教大学教授）

3月8日（木）18:30～20:00

浦和コミュニティセンター第6集会室

会費：無料

なお第2部として懇親会を予定（各自負担）

社団法人埼玉障害者自立生活協会

問合せ：大坂：090-4938-8689

越谷市障害者生活支援センター苞（ぱお）主催

地域生活セミナー

2012年3月20日（祝）午後1時半～

越谷市北部市民会館 第1・第2会議室

◇わたしの暮らし

ヘルパーなど制度を利用している障害当事者のお話（3名）

◇居宅介護事業所から

ヘルパー派遣をしている事業所の方にケアの現場の様子や事業所の役割についてお話いただきます

- ・こしがや社協 田澤さん
- ・ケアシステムわら細工 谷崎さん

お問い合わせ：

越谷市障害者生活支援センター苞（ぱお）

電話 048-970-9393

TOKOミニおしゃべり会

（毎月1回）

気軽にお立ち寄りください

次回は

3月16日（金）10:30～12:00

会場：生活ホーム・オエヴィス

越谷市恩間新田232-3 TEL:0489-75-1524

駆け込み寺として お茶のみ場として 情報を伝え合う

場として さまざまな立場の人の出会う場として……

主催：わらじの会・どの子ども地域の学校

へ・公立高校へ 東部地区懇談会

「障害児」の高校進学を実現する

全国交流集会実行委員会

4月1日（日）

浦和・岸町公民館第1会議室

連絡先・竹迫 048-942-7543

全国交流集会は10月6日（土）～7日（日）
 本県嵐山町の国立女性教育会館で行います。全国各地で「0点でも高校へ!」、「希望者全入」の取り組みを進めている団体・個人を招き、語り合い、交流を深めるイベントに手を貸して下さい。

子ども☆夢☆未来フェスティバル

2012年3月4日（日）10:00～16:00

会場：埼玉県県民活動総合センター（伊奈町）

- (1) 歌とトークショー10:30～：今井絵里子さん（歌手・SPEED・1児の母）(2)ミニSL・働く車に乗ってみよう・移動水族館・歌・ダンス・工作・模擬

店ほか

主催：子ども☆夢

☆未来フェスティ

バル2012 実行

委員会

NPO法人 彩の子

ネットワーク



例年のように（社）埼玉障害者自立生活協会関係の団体で共同の店を出します。お手伝い募集！

連絡先：080-6608-1275 植田